

『阿讚伊土和歌抄』について

書名の「阿讚伊土」はアサイトと読む。『国書総目録』ではアサンイトと読んでいるが、跋文に「麻糸」とあるので明瞭である。ちなみに俳諧集にも『阿讚伊土集』（万延元年刊）がある。阿波・讃岐・伊予・土佐四国の頭文字を取り、それに麻糸の意を利かせた名称である。神沢杜口『翁草』には、早く霊元法皇の御作として「四国の刀 麻糸と解く」（麻糸は刀の柄糸に用いる）という謎をあげているが、すでに流布していたこの謎による命名であろう。

和歌に詠まれた土地は歌枕として意識され、和歌の名所となった。諸国の歌枕を集めたものには早く『能因歌枕』があり、以後中世では宗祇の『名所方角抄』があり、近世に入ると『歌枕名寄』『松葉名所和歌集』『秋の寝覚』等大部な名所和歌集が出版されている。近世では地方文化の興隆とともに、地誌の編纂において歌枕が取り上げられ、名所和歌が収集された。またそれを集大成する形で、各国の名所和歌集が成立していく。たとえば伊予においては『予陽郡邑古考鈔』に始って『予陽郡郷俚諺集』『伊予二名集』『愛媛面影』等の地誌が伊予名所和歌を収集し、その上に立って『山冠集』『扶桑名所和歌鈔』が編まれている。それに

『阿讚伊土和歌抄』について

白方 勝
(国文学研究室)

応じて「矢野神山」「入野」の名所顕彰も行われている。

こうした経緯は各国にみられるであろうが、四国を一つにした集の編まれたのは本書が唯一のものである。本書の成立は、跋文によれば、宝暦六年（一七五六）、積冬阿の撰。京都の書林橘枝堂野田藤八の板行である。冬阿は讃岐国の歌僧であろうが、その素性は不明である。

底本は今治市河野美術館蔵。大本木版二巻二冊。題簽は「阿讚伊土和歌抄 乾」同「坤」と墨書して貼付、綴直し時の後貼であろう。乾巻は、阿波八丁（半丁白紙）、讃岐二十八丁（半丁白紙）を収める。最終丁板心に「三十九」とある。坤巻は、伊予十一丁（半丁白紙）、土佐六丁半、跋文一丁分を収め残り半丁に刊記を記す。伊予最終丁に「五十一」、跋文最終丁に「六十」と丁付がある。「不忍文庫」「阿波国文庫」の朱印がある。

多和文庫にも刊本一冊を蔵する。改装であるが、「阿讚伊土和歌抄 讃岐」（以下伊予・土佐）と記した中扉を三丁入れているところから、もともと一冊本であったと思われる。本文は河野本と同板であるが、刊記と伊予の「五十一」の丁付がない。別刷の刊行であろうか。

伊予史談会文庫に写本一本を蔵するが、筆写に関する識語等は一切ない。刊本からの写しであると思われるが、かなり杜撰なものである。特に「伊予」の部は刊本によらず、『扶桑名所和歌鈔』等によったと思われる。他三国についても歌の順序を入れかえたり、また五首を書き落している。表記も刊本通りではない。また跋文もない。

しかし、この刊本自体もかなり杜撰なものである。所収の歌を『国歌大観』と比較してみるとかなりの違いがある。なかには冬阿の拠った本との異同もあるが、それだけでは処理しえない誤字と思われるものも多い。『国歌大観』について当れるものは、詞書の下にその番号を付し、歌詞の異同はその右に（ ）を付して記した。

内容的にみれば、四国各国の名所和歌を集めたものであるが、特に讃岐の多いのは撰者冬阿が讃岐の人であり、西行に仮託してあるように、西行を慕ってその来遊を中心に集めてあるからである。また、いわゆる勅撰集など由緒ある歌が中心で、伝承歌の少ないのは、同地名による付会はあるにしても、冬阿の真実な姿勢を示すものであろう。過剰な郷土意識のないのはよいことであるが、いかがわしき歌の氾濫に見るおもしろさに欠けるうらみなしとしない。そうした点では、本集は以後の郷土名歌和歌集の基礎的な整理をしたことに意義がある。

ここで一つだけ注意しておきたいことがある。伊予の「入野」についてかつて私は、明和二年（一七六五）、伊予宇摩郡土居入野の庄屋山中関朴・時風父子（ともに俳人）が入野顕彰を行った結果、『予陽俚言集』等では記載のなかった入野が、『伊予二名集』（文化頃）では和歌の名所に認められることになったと指摘した（『愛媛県史・文学』等）が、本集によれば、九年以前に冬阿が入野をそれと付会認定していたことになる。山中家の残存書目の中に本書はないが、阿波、讃岐方面から入手した本もあるので、失亡した書目の中に本書があつて、関朴らはこれを見

て入野顕彰を思い立ったのではないかという推測もあながち否定できなくなつた。こうした問題は他の三国にもあるかもしれないし、その他の問題をも提供しうる可能性もあるかと思ひ、紹介する次第である。

翻刻は、今治市河野美術館蔵本を用ひ、表記は常用漢字を用いたほかは原本通りとした。詞書、長歌は適当に句読点に当る個所を一字あけにした。（ ）はすべて筆者の注記である。

なお、資料を拜見させていただいた今治市河野美術館、多和文庫、伊予史談会文庫には厚く御礼申し上げる。

阿讃伊土和歌抄 乾

阿讃伊土和歌抄 阿波

歌集阿波国歌（二八八）

柿本人麿

梢のみあわと見えつゝはゝ木々のもとをもとよりみる人そなき

万葉六（二〇〇三）

船 王

まゆのこと雲ゑにみゆる阿波の山かけてこく舟泊りしらすも

万葉七 九 十二 十五（二二三六）（二七一五）（三一八一）（三六五五）

作者不知

あわ嶋にこきわたらんと思へともあかしのとなみいまたさはけり
もゝつたふやその嶋わをこきくれとあわの小嶋は見れとあかぬかも

浪間より雲みにみゆる阿波嶋のあかぬ物ゆへわれによるら
あわ嶋のあはしと思ふいもにあれややすいもねすてあかこひわたる

源氏物語(二二二・二九六)

阿波とみるあわちの嶋のあはれさへ残るくまなく澄る夜の月
めぐりきて手にとるはかりさやけきやあわちの嶋のあはと見し月

家集(三八〇)

思ふこと鳴戸の浦に拾つゝかひありけるとしらせてしかな

相模

兼好法師

世中をわたりくらへて今そしる阿波の鳴戸になみ風もなし

拾玉(一四五)

慈鎮和尚

数ならず鳴戸の浦の浦人もなみの夜ひるものをこそ思へ

山家集(六九四)

西行上人

せと口に立るうしほのおほよとみよとむとしひもなきなみた哉

堀川百首

右近

風はやく鳴戸の浦の舟よりもとまり定めぬわか身也けり

続千載(一五六四)

平時之

いかにせむよそに鳴との沖つ波はてはよるへもしらぬ恨を

新後拾遺(九一五)

読人不知

あわちかたせとのをひかせ吹そひてやかて鳴戸にかゝる舟人

家集(夫木六九〇五)

藤原経家朝臣

契しにあらす鳴戸浦の千鳥あとたに見せぬ恨をそする

御集(夫木一五八七二)

後九条内大臣

いそかてやかちひきおりて舟人もあすになるとのしほやまつらん

類題

御製

秋ふかく鳴戸の海のはや汐に落行月の淀むせもかな

東宮に鳴戸と云とのもとに女共のものいひけるに おやの戸をさ

してあていりにければ またのあしたにつかはしける
後撰(六五一) 藤原滋鞋(幹)

なるとよりさしいたされし舟よりも我そよるへもなき心ちせし

千五百番歌合 家集(二一三七)

家長朝臣

君が代ははるかなるとのはまひさしひさしきかけは神のまに

大和物語(二三四)

江口遊女しろ

はまちとりとひゆくかきり有ければ雲たつ山を阿波とこそみれ

家集(二一九八)

慈鎮和尚

牙きぬる冬のしほ風北吹て阿波の鳴戸の音そはけしき

保安二年九月内大臣家歌合 家集(二〇三三)

俊頼朝臣

暮ゆけはしのひもあへぬわか恋や鳴戸の浦に見つしほのせと

家集(四二六)

和泉式部

声をたにかよはんことはおほしまやいかなになるとの浦とかはみし

女のもとに行て物いひけるに 雨のいみしうふりて いとくらう

新千載(二二三八)

壬生忠見

おとにきく鳴戸の浦にかつきするあまよわひしきめをみする哉

家集

従三位成清

心してとま引おほへうき雲も雨になるとの興つふなひと

ゝ

みつね

むこの浦や朝みつ汐の追風に阿波嶋かけてわたる舟人

ゝ(夫木一〇五五九)

山辺赤人

むこの浦漕まふ小舟あわ嶋をそむきにみつゝともしき小舟

浜辺霞(夫木一〇五六二)

重之

もゝつたふ八十の舟ちの夕かすみいくへ隔てつあわのしま山

禅林七百

具氏

淡路嶋阿波とみゆれと塩のまをめぐれば月や遠ざかりなん

家集(四六三) (躬恒)

あわちにてあわ渡はるかにみし月のちかき今宵はどころかくかも

阿波の守になりて 又おなし国にかへりなりて下りけるに こと

かみのうらといふ所に波の立をみてよみける

後拾遺(一一三〇) 基房

こつかみの浦にしてよる浪の同じ所にかへるなりけり

阿波国土佐泊りといふ所にて 日記(三七) 貫之

としころをすみし所のなにしおへはきゆる浪をもあはれとそみる

さくらまの池 夫木(二〇八二四) 読人不知

鏡ともみるへき物を春くればちりのみかゝるさくらまの池

玉津嶋山 夫木(八三九二) 赤人

しほひれはたまもかりつゝ神代よりしかもたうとき玉津嶋山

弘安三年家集百首

里の海人(夫木七一〇) 安嘉門院四条

いくしほの袖に色香をうつすらん春は梅さくさとの海士人

家集 浦鶯(夫木四四二) 藤原隆祐朝臣

浦風にはなもにはぬ里のあまの柴の垣ねもうくひすそ鳴

家集(一四七一) 後京極摂政(良経)

馴にけり一夜宿かすさとのあまの今朝のわかれも袖しほれつゝ

仲正 (夫木三二八二)

里のあま鳴門の浪に耳なれてたゞく水鶏におとろかぬ哉

狭衣(一三四・一三三) 大貳三位

のこりなくうぎめかつきし里のあまを今くり返し何恨らん

藻かり舟なをにこり江に漕かへりうら見まほしき里のあま哉

家集(三九) 鴨長明

月清みいその松かね礎にて衣うつなりさとのあまひと

家長朝臣 (夫木五八〇五)

里の海人の塩やき衣うつ音もま遠にひゞく風のおと哉

寂蓮法師

さとのあまの焼すさひたるもしほ草又かきつめて烟たてつる

八条院高倉

里の海士の定め宿も埋れぬよする渚の雪のしらなみ

西行上人 (六九三)

いそのまに波あられなる折／＼はうらみをかつくさとのあま

御集(七五九) 後鳥羽院御製

里のあまのたくもの煙心せよ月の出しほの空はれにけり

蓮生法師 続後撰(三五二)

さとのあまの浪かけ衣よるさへや月にも秋はもしほたるらん

中納言定家 (家集)(二二五〇)

さとのあまの塩やき衣立かへりなれしもしらぬ春の鴈かね

正三位成実 新統古今(二四九二)

あまの任里のしるへを恨ても行方しらす立けふりかな

藤原雅顕 新後撰(二〇四八)

さとのあまのかりそめなりし契よりやかてみるめの便をそとふ

法皇御製 百首の歌よませ給けるととき 恨恋

とはゝやなうらみなれたる里のあまも衣ほすまはなき思ひか

後京極摂政 家集(一四七一)

なれにける一夜宿かる里のあまのあさのわかれも袖しほりつゝ

宮内卿家隆 (家集)(二二六六)

さとの海士の夏の衣をおる浪の日影もうすき浦風そぶく

文可 新(後)拾遺(五六二)

埋れぬ烟を宿のしるへにてゆきに塩くむさとのあま

阿波国里のあまといふ所にて 夫木(二二二四)

法印素寛

もしほ草かきあつめたるかひ有て見るめうれしき里のあま

(讃岐国)

讃岐国狭峯嶋石窟中死人を見て作歌一首并短歌 万二(三三〇)

柿本朝臣人麿

たまもよきさぬきの国は くにからか見れともあかぬ かみからかこゝ
たかしこぎ あめつちの日つきとともみ ちゆかん神のみおもとつ
きてくる中のみなどに ふねうけてわかこきくれは ときつかせ雲ゐに
ふくに おきみればあとの浪たち へをみれば白波とよみ いざな
とる海をかしこみ ゆくふねのかち引おりて おちこちのしまはおほか
れと 名くはしきみねのしまの あらいそもにいほりつくりて見れば
波のとのしけきはまへを しきたへの枕になして あらとことよりふす
君か いへしらはゆきてもつけん つましらはきてもとはましを 玉ほ
この道たにしらす おほくしくまぢかこふらん おしきつまらば

反歌(二二・二二三)

つまもあらはとりてたきましきみの山のかみのうはぎすきてけらしや

おきつなみきよる荒磯をしきたへのまくらとまきてなせる君かも

那賀の湊 夫木(二一八八)

権僧正公朝

しき嶋のなかのみなどのさよ千鳥つまよひたてうらつたひ行

左美嶋 夫木

中納言為家

左美嶋やましにかよふ海士小舟かたほにいるゝあをの山風

夫木(一〇五七〇)

夕されは佐美ねの嶋に鳴ちとりあらいそ道に汐やみつらん

さぬ山 万十四(三三九二)

人丸

さぬ山にうつやおのとのとほかともねもとかころかおゆに見えつゝ

家集 讃岐国の歌(二九八)

我はけさぬきて帰りぬから衣夜の間といひしことをわすれず

讃岐国御幸の時綾の郡山を見て作歌一首并短歌 万一(一五)

軍王

かすみたつなかきはる日の くれにけるわつきもしらす むらきもの心
をいたみ ぬえことりうらなきおれは たまたすきかけのよろしくと
をつかみわかおほきみの みゆきの山こしの風の ひとりるわかころ
もてに あさゆふにかへらひぬれは ますらおとおもへるわれも 草枕
たひにしあれば 思ひやるたつきをしらに あみのうらのあまおとめら
か やくしほのおもひそやくる わかしたこゝろ

反歌(一六)

やまこしの風を時しみぬる夜おちすいへにあるいもをかけてしのひつ

網の浦 万十一(二七五三)

読人不知

なか／＼にきみにこひすはあみのうらのあまにあらましを玉もかる／＼

寛喜元年女御入内屏風海辺

綱引所 新勅(二二〇)

正三位家隆

浪かせものとなる世の春にあひてあみのうら人たゝぬ日そなき

夫木集(六九〇二)

後九条内大臣

網のうら朝ひく汐の浪間よりめにもかゝらす行千とり哉

松山百首

宝密

いつの間もなみ間にあけて網の浦やめにもたまらぬ短夜の月

松か浦 万十四(三五七四)

柿本朝臣人丸

松か浦にさわゑこくたちまひとことおもほするもろわかもほのすも

頓證寺法樂松山三百首

中納言常永

舟うけて浪しつかなる夕なきにつきのおしほやまつか浦なみ

飛鳥井榮雅

けふよりの春をは空に吹たてゝなみもおさまる松かうらかせ

慈鎮和尚

四方の海や霞のとけき松か浦の春の湊にはるかせそふく

源有中

藤浪のかゝれる松かうらにきてみるめにあかぬあまと成ぬる

從二位家隆

咲かゝるうらむらさきの藤なみをみとりにかへす松か浦かせ

中納言定頼

讃岐へまかりける人につかはしける 後拾遺(四八六)

松山のまつのうらかせふきよせはひろひてしのへこひわすれ貝

源光成朝臣

たかねよりしほりもあへぬころもてにまたきなかけそ松か浦波

橋俊綱朝臣讃岐守にまかりける時祝の心をよめる

千載(六三三) 藤原孝善朝臣

君か代にくらへていわゝまつ山の松のは数そすくなかりける

古今集(一三七) 読人不知

五月まつ山ほとゝきす打はふき今もなかなんこそその古声

紀貫之

郭公人まつ山になくなれば我うちつけに恋まさりけり

大和物語(二三五)

日くらしに君まつ山のはとゝきすとわぬときにて声も惜まぬ

(千五百番 六九七)

うち付にそれかとそきく子規人まつ山のしのひねのこゑ

家集 二条院讃岐

なからへて猶君か代を松山のまつとせしまに年そ経にける

弘安二年若宮百首 紅葉 夫木(六〇五五) 安嘉門院四条

松山にはゝそかえてのましらすは時雨けりともいかてかはみん

家集(五〇) 好忠

色かへすみゆるさぬきのまつ山も春はみとりのふかさまされり

栄華物語(七七)

かすならぬ 道しはとのみ なけきつゝ はかなくつゆの おきふしに

明くれたけの おみゆかん 此世のすへに なりてたに うれしきふし

や みゆるらん いつしかとこそ まつ山の たかき梢に すこもれる

またこつたはぬ うくひすを むめの匂ひに さそはせて 下略ス

崇徳院さぬきへおはしまして後 歌といふことの世にいとときこえ

さりければ 寂然かもとへいひつかはしける 西行上人

山家(二二八)

ことの葉のなきけ絶にし折ふしにありあふ身こそかなしかりけれ

かへし(二二九) 寂然

しきしまや絶ぬる道になくゝも君とのみこそ跡をしのはめ

さぬきにて御心引かへて後の世のこと御つとめひまなくせさせお

はしますと聞て 女房の許へ申ける 此ふみをかきぐして

若人不噴打以何修忍辱(二二三〇) 西行上人

世中をそむくたよりやなからましうき折ふしに君にあはすは

是もついでにくくしてまいらせける(二二三一)

あさましやいかなるゆへのむくひにてかゝることしも有世成らん

かへし(二二三六・二二三七) 女房

松やまのなみたは海にふかくなりてはちすの池にいれよとそ思ふ

波のたつ心のみつをしつめつゝさかんはちすを今はまつかな

(新) 院松山におはしましけるに便りにつけて女房のもとより

(一一三六)

水くきのかきなかつへきかたそなき心のうちはくみてしらなん

かへし(一一三七)

西行上人

ほと遠みかよふ心の行はかりなをかきなかせ水くきのあと

又女房つかはしける(一一三八・一一三九)

いとゞしくうきに付ても頼む哉契し道のしるへたかふな

かゝりけるなみたにしつむ身のうさを君ならすして誰かこたへん

かへし(一一四〇)

西行上人

頼むらんしるへもいさやひとつ世の別にたにもまよふころは

松山本縁記(保元物語五)

崇徳院

はまちとり跡は都にかよへとも身はまつ山に音をのみそなく

比御歌は都へ御経をのほさせ給ふ時の御歌となん

爰もまたあらぬ雲ゑと成にけりそら行月のかけにまかせて

比所を松山の御所といふ

家集

藤原信実朝臣

秋かせに妻まつ山の夜をさむみさこそ尾上の鹿は鳴らん

秋の歌中

平宗宣朝臣

心あらは立なへたてそ小男鹿の妻まつ山の秋の夕暮

兼讃岐守たりし時綾の松山に遊ひて

扶桑略記

菅家

常盤木となに思ひけん是程に雪の花咲綾のまつ山

降ほとはそれともきゝし声たへすあらしをうつむ雪の松山

月の比松か浦に遊ひて

影うつす波を磯部にふきよせて月も岸うつ松かうら風

山ひめのあしたのくもは海にして波かときけは松か浦風

まなへと申嶋へわたり待りしに 京よりあき人共下りてやう

くみの物ともあきなひて 又しわくの嶋へわたりてあきな

はんするよし申けるを聞て 山家(二三七四) 西行法師

まなへよりしわくにかよふあき人はつみをかひにて渡るなりけり

くしにさしたる物をあきなひけるを なにそととひければ はま

くりをほして待る也と申けるを聞て(一三七五)

おなしくはかきをそさしてほしもすへきはまくりよりはなもたよりある

院松山におはしませし時 御笛の師御跡をしたひきたりしに御た

いめんなりければ

おもひきや木の丸殿を尋きてあはてむなしくかへるへしとは

此歌の御かへし 頓證寺の深秘ゆへ是をのせず 権中納言為重

新後拾遺(二四七)

五月やみともすほくしのまつ山にまつとて鹿のよらぬよもなし

新後撰(三三三)

兵部卿隆親

夕くれはわきてあはれやしらるらん妻松山のさをしかのこゑ

(新後撰)(五二二)

祝部忠長

出ぬよりこほりてさゆる光かな月まつ山のみねのしらゆき

風雅(三三二)

藤原為基朝臣

猶そまつ山郭公ひとこゑのなこりを雲にしはしなかめて

新葉(五一五)

読人不知

おもひきや心つくしのかひなきに人まつ山によしやきかれし

さぬきの国へまかりてみのつと申津につきて 月のあかくてひ

の手もかよはぬほどにとをくみえわたりたりけるに みつとりの

ひゝのてにつきてとひわたりけるを 山家(二四〇四) 西行上人

しきわたす月の氷をうたかひてひゝのてまはるあちのむら鳥

崇徳院讃岐にしてかくれさせ給ひて後に 御供なりける人の辺よ

りつたへられて かかることなんありしとておりかみに 御宸筆
なりける物をつたへおくられし也 家集(俊成)(五八一・五八二)

いにしへの すまのうらに もしほたれ あまのなわたぎ いさりせし
その言のはは きしかと 身のたくひには なきわたる 岩うつなみ
の かけてたに おもはぬ外の なをとめて しつみはてぬる われ舟
の われにもあらず とし月も むなしくすきの いたぶきの ならは
ぬことに めもあはて 思ひしとけは さぎの世に つくれるつみの
たねならて かゝるなげきは なることは あらしの風の はけしきに
乱しのへの いとすゝきはすへにかゝる 露の身の 置とめかたく
みえしかは そのくれ竹の よをこめて おもひ立にし あさころも
袖もわかみも 朽ちる朽ぬれと さすかにむかし わすれねは 雲井の
月を もてあそひ 山路の菊を たれかまた 時につけつゝ まといし
て 春秋おほく すきにしを 今は千年を へたてまで 初かりかねも
ことつてす なれにしかたは おともたへぬ もとの心し かはらすは
ことつけつゝ きみはなを 詞のいつみ はくらめと みしはかくたに
くみてしる 人もまれにや なりぬらん さらにもしはず かなしきは
ことをたちにし からくにの 昔のあとに ならひてや 深きうきめも
ねもたへぬ かつ身の程を いとへとも 心のみつし あさければ む
ねの蓮は いつしかに ひらけんことは かたけれと たとるくも
くらぎよを いつへき道と いらぬれば ひとたひなども いふ人を す
てぬ光に さそわれて 玉をつらぬる このしたに 花ふりしかむ 時
にあはゝ 契おなしき 身となりて むなしき色は 染おしき ことのは
ことも ひるかへし まことの法と なさむまで あひかたらはん こと
をのみ 思ふころを しるやしらすや
夢のうちになれし契朽もせてさめんあしたに逢事もかな
宮におはしませし時 かやうのみちにもつかうまつりし人はおほ

かりしを とりわきおほしめし出しけんこともいとかなしくて
人しれず御返事をかきておたきの辺になんやらせける(五八三・五
八四)

皇大皇后大夫俊成

すまの浦や もしほたれけん 人もなを いまをみるにも うきなみの
うきためしには 猶あさし 哀うき身の そのかみを 思ふにつけて
かなしきは あれにし宿の 人におふる みなしこくきと なりしより
ふるすに残る あしたつの 沢へのみそ としへしを 初めて君の 御
代にこそ 雲のかけはし ふみかよひ たつのみかほに ちかつきて
時につけつゝ むなしくは すぐさす見えし あつさゆみ まとひし末
に つらなりて はなの春より ほとゝきす まつあかつきも あぎの
よの 月をみるにも こゝのへに ふりつむ雪の あしたまで 物おも
ふことも なくさめし 九の重を いてしたに 袖のこほりは い
かにありし あぎのは衣 ぬきかへて はこやの山に うつりしも 山
路の菊を 手折つゝ 過るよはひも 忘れしを いかにふぎにし 初あ
ぎの あらしなりけん 山しろの 鳥羽の面に 日影くれ もりの松
かせ かなしみて 夕のそらと なりしとき 人の心も おしなへて
のへのかや原 みたれつゝ まよひし程は むは玉の 夢うつゝとも
わかさりき さらにもしわす 和田の原 むなしき舟を うきはなれ 波
ちはるかに へたてつと きへし別の かなしきは たとへん方も な
きよにて あまのよるてふ もしほ草 かきてもやらん かたもなく
むなしき空に あふけとも 心はかりは まつ山の 嶺の雲にも まつしけ
ん たゝかたみとは しめおきし やまとみことの ことのはを みれば
なみたま もろともた たまのこへく つらなりて にしきいろく
たちましり かゝるたくひは いにしへも いまゆくすへも いかゝあ
らん さても年月 うつりゆく しきしまの道 立かへり 雲ぬの月に

さそはるゝよな／＼まれに ありしかと 月のまへには むかしおほ
へ 花のもとにも 君を思ふ たゞとことには なけきつゝ いつもか
はらぬ 埋木の しつめることは ことのねを むかしたちけん をに
よせん 立てし道と のかれつゝ 心ひとつの むなしさは あゆむくさに
は そてぬれて ことは露は おのつから たまるゝせより ときもあ
れ あさちかしたに よつきゝて あはれしるへき 人もなし さりとも
稀に たちかへる 波もやあると おもひしを ついに千里の ほかに
して 秋のみ空に 月かくれ たひのみゆりに 露けぬと 汐路へたて
ゝ ふくかせの はしにもこへし ゆふへより 今のはかなき 夢の中
に あひみん事は なく／＼も 後の世にたに ちぎりありて 蓮の池
に むまれあわゝ むかしも今も このみちに 心をひかん もろ人は
このことのはを ゑんとして おなしみくにゝ さそはさらめや
さきたゝん人はたかひに尋みよ蓮のうへにさととりひらかん

崇徳院松山におはしましけるに参りて日数経て都へまかりなんと
しける暁によめる 風雅(九五〇) 寂然法師

かへるとも後には又と頼むへきこの身のうたてあたしも有かな
さぬきに詣て松山と申所 院おはしましけん御あとたつねけれと
かたもなりければ 山家(二三五三・一三五四) 西行上人

松山の浪になかれてこし舟のやかてむなしくなりにける哉

まつ山の浪のけしきはかはらしをかたなく君はなりましにけり

仁安の比西国はる／＼修行仕侍りしついでに讃州みを坂の林とい
ふ所にしはらく住侍き 深山辺のならの葉にて庵結て妻木こりた
く山中のけしき花の梢によはる風 たれとへとてかよふことりよ
もきかものうつら 日終にあはれならずといふことなし 長夜
の暁さけひたる猿の声を聞にそゝろに腸をたち侍り かゝる栖は
後世の為とも侍らねともこゝろそゝろに澄ておほゆるにこそか

くても侍るへかりしに浮世の中には思ひをとゞめしとおもひ侍り
しかは立離れなんとし侍りし程に 新院の御はか所をおかみ奉ら
んとて白峯といふ所に尋参侍りしに 松の一むらしけるほとり
にくきぬきしまはしたり 是なん御墓にやと今更かきくらされて
物もおほえすまのあたり見奉りて(保元七) 西行上人

よしや君むかしの玉のとことてもかゝらん後はなにゝかはせん
頓證寺法衆松山百首 正三位公種

あかすみる木末の色は白みねの雲さへ同じはなの夕はへ
法衆詠三十首頓證寺御参詣の時 九条内大臣植道

たちつゝく霞に雪は白峯のほかにいつれかよそにみるらん
頓證寺法衆三百首 従三位元家

今かゝる身のなにことを松山にすみわひぬとはなけきはてけん
浪こさぬなかをもまもる神ならば此松山をかけてちきらん
雅清

性光

是も又玉の床とや松山のしたつゆみかく有明のつき
正三位公種

水くきのあとのめくみを松やまに千代ふる寺や猶さかへまし
宝城

松山のまつは常盤の色なるをなつきにけりとしける下草
としつな朝臣讃岐にて綾川のちとり説侍りけるによめる
藤原孝善朝臣

霧晴ぬあやの川辺に鳴ちとり声にや友の行方をしる
後拾遺

松山百首 飛鳥井栄雅

夜やさむみきわの浪におりはへて千鳥しは鳴綾の川風
松山一日千首 野沢 松山縁記 宝城

五月雨の空にまかせてこのころはせきこそいれね野沢井の水

伊那

雪ははや消行まゝに朝みとり春とそみゆる野への野沢井

今此所をやさはの清水と云

家集(五七五二)

慈鎮和尚

いほりさす野沢の夏の夕すゝみ物とこそせき秋にも有かな

家集恋歌中(夫木・一三五一)

修理太夫頭季

いかにせん野沢におふるまろすけのまろすけもなき恋にけぬへし

正治二年百首(二二一〇)

宜秋門院丹後

風わたる春の野沢のさわらひは波にまかせておるにそ有ける

六帖題(夫木・一二五六)

民部卿為家

夏草の野沢かくれのはぬけ鳥ありしにもあらずなるわかみかな

家集(夫木・一二六八七)

前大納言忠良

朝ほらけ野沢のきりのたつまより立しらすききの声のさむけき

道助法親王家五十首の歌海の旅 玉葉(新統古一七四八)

正三位家隆(行能)

泊りの磯(夫木・二〇七九)

家集(四四四)

紀貫之

とまりてふこの所には来る人のやかて過へき旅ならなくに

続拾遺(七〇二)

野宮左大臣

夕汐の磯こす浪をまくらとてかせにとまりの日数をそふる

白川七百首

真観

浦かくれ泊るとまりのかち枕うきねをさむみ月をみるかな

松山百首

中納言院尹賢

和田の原とまりありとや行年にかけても春をまつか浦なみ

家集(二四三八・員外三八八)

中納言定家

こきよするとまりさひしき塩かせに又夢さましちとり鳴なり

秋のよの影かたふきぬ望月のとまりはそらのもなか也けり

筆の海 弘安百首(夫木・一五〇九四)

後九条内大臣

なからへて身にそしらるゝ筆のうみかくまでかゝはけにいとまなし

家集(夫木・一一九〇六)

中納言為家

水茎の岡のみなどのなみよりやふてのうみてふ名には立らん

水茎の丘の湊 草庵

頼阿法師

みつくきの岡の湊のもしは草かくともつきしふかき思ひを

家集(夫木・一一九〇七)

素還法師

みつくきの岡のみなどの浪のうへにかすかきすてゝかへる雁かね

六帖題(夫木・一一九〇二)

遣遥院

思ふことかきもつくさし水茎のおかのみなどの秋の夕へは

万葉七(二三三五)

読人不知

あきぎりあひひかた吹らし水茎の岡のみなどに浪たちわたる

御集(夫木・一一九〇二)

光台院入道二品親王

水茎のおかの湊にたつ浪のふかきそこをばくみてしららん

六帖題(夫木・一一九〇四)

権僧正公朝

ひかた吹おとそさひしき水茎の岡のみなどの秋のしほ風

御集(夫木・一一九〇五)

後九条内大臣

月かけのやとれはこほる水茎の岡のみなどに秋風そふく

十市池 家集(夫木・一〇七五八)

前大納言為家

今ははやとをちの池のみくりなわくるよもしらす人に恋つゝ

十市里 南海国史

清少納言

爰なからほとふるたにもある物をいとゝとをちの里のなきかせそ

阿遅可麻野 万十四(三七五三)

柿本朝臣人麿

あちかまのかたにさく浪ひらせにもひもとく物かかなしけをおきて

詞花集(二七八)

大藏卿匡房

春くれは安治かたの海一かたにうくてふ魚の名こそおしけれ

御集 百首歌(夫木・六八三)

土御門院宰相

あさな／＼浦かせさむみあちかまのしほつをさして千鳥鳴也

床の浦 後拾遺(八一四)

相模

やくとのみまくらうへに塩たれて煙たへせぬ床のうらかせ

玉葉集

中納言為家

床の海わか身こそ波よるとても打ぬる中にかよふ夢かも

家集(二七二)

家隆

鳴なみたよな／＼つもる床のうみのもに住むしや我身なるらん

琴ひきの浦 夫木(二一六〇四)

中納言忠正

松風に波のしらふることのうらはかもめのあそふ所なりけり

房崎の入江 南海国史

行基

汐みちて嶋の数そふ房さぎの入江／＼のまつ村たち

引田の浦 家集

西行法師

はしたかのしくも引田の浦なれや沖江にかゝる白鳥のまつ

六ツ妻山 家集

同

かるもかきひとりふすもあるものを六つ妻の鹿は何を鳴らん

絃打山 夫木(八四五〇)

読人不知

つるうちの山より出る月かけは弓はりとこそいふへかりけれ

松山一日千首

道歎

梓ゆみはるてふけふはたちかへりつるうち山にかすみたなひく

承久の後御百首男木の湊(夫木・一一九〇九) 後鳥羽院御製

なみまわけおきの湊にゐる舟のわれそこかるゝたえぬ思ひに

讃岐国善通寺にて読侍ける 新統(古)(八三五) 僧正宋縁

高野山その暁をちぎりきてこゝにもおなし月や住らん

讃岐国に大師のおはしましける御あたりの山に形のことくなる

庵むすひて住ける月いとあかくて 海のかたくもりなく見へ侍り

ければ 山家(二三五六) 西行上人

くもりなき山にて海の月見れば嶋そ氷のたえまなりける

四国のかたへくしてまかりたりける同行の都へかへりけるに

(二〇九七)

かゑりゆく人の心を思ふにもはなれかたきはみやこなりけり

ひとりみをきて帰りまかりなんすこそ哀に いつか都へはかへ

るへきなと申ければ(二〇九八)

柴の庵のしはし都へかへらしと思はんたにもあはれなるへし

すみけるまゝに庵いとあはれに覚えて(二三五七・西行家集五四七)

今よりはいとほし命あれはこそかゝる住みの哀をもしれ

山里にうきにいとほむ友もかなくやくし過し昔かたらん

庵の前に松のたてりけるをみて(二三五八・二三五九)

ひさにへて我後の世をとへよ松あとしのふへき人もなきみそ

こゝを又我すみうくてうかれなは松はひとりにならんとすらん

雪のふりけるに(二二六〇・二二六六)

松のとは雪ふる折の色なれやみな白妙にみゆる山ちに

雪つみて木も分す咲花なれはときわの松も見えぬ也けり

はなとみる梢の雪に月さへたとへんかたもなき心ちする

まかふ色は梅とのみ見て過行に雪の花には香そなかりける

折しもあれうれしく雪のうつむ哉きこもりなんと思ふ山路を

中／＼に谷の細道うつめ雪ありけん人のかよふへきかは

たにの庵に玉のすたれをかけましやすかるたるひの軒をとちすは

はなまいらせけるおりしもおしきにあられのふりかゝりければ

(二二六七)

しきみをくあかのおしきにふちなくは何にあられの玉とまらまし

大師のむまれさせ給ひたる所とてめぐりしまはして そのしるし

の松のたてりけるをみて(二三六九)

哀なりおなし野山にたてる木のかゝるしるしのちきり有けり

岩にせくあか井の水のわりなきは心すめともやとる月かな(二三六八)

まんたらしの行道所へのほれは よの大事にて手をたてたるやう

也 大師の御経かきてうつませおはしましたる山のみね也 はう

の卒都婆一丈はかりなるたんつきてたてられたり それへ日ごと

にのほらせおはしまして行道しおはしましけると申伝へたり め

くり行道すへきやうにたんも二重につきまはされたり のほるほ

とのあやうきことに大事なり かまへてはひまわりつきて(山家

一三七〇)

めぐりあはんことのちきりそたのもしききひしき山のちかひみる哉

やかてそれからへは大師の御師にあひまいらせさせおはしました

る峯なり わかはいしさとその山をば申也 その辺の人は

いしとそ申ならひたる 山もしをすてゝ申さす 又ふての山

ともなつけたり とをくてみねはふてに似てまるくと山のみね

のさきのとかりたるやうなるを申ならはしたるなめり 行道所よ

りかまへてかき一丈のほりて嶺に参たれば 師にあはせおはしま

し所のしるしにたうをたておはしましたりけり たうの石すへは

かりなくおほきなり 高野の大とうはかりなりける たうのあと

ゝみゆ 苔はふかくうつみたれとも石おほきにしてあらはにみゆ

筆の山と申名につきて(山家 三七一)

ふての山かきのほりてもみつる哉昔の下なる岩のけしきを

善通寺の大師の御影にはうはにさしあけて大師の御師かきくせら

れたりき 大師の御手なともおはしましき 四の門のかく少く

われておほかたはたかはすして侍き すへにこそいかゝなりけん
さらむ おほつかなくおほへ侍りし

阿讚伊土和歌抄 坤

阿讚伊土和歌抄 伊予

伊子の国湯宮へ御幸の時 熟田津石湯の行宮にて作歌 日本紀廿六

齐明天皇御製

にきたつにふなのりせんと月まではしほもかなひぬいまはこきこな(八)

伊予国温泉に至て作歌一首并短歌(三三五) 山部宿祢赤人

すめろきの神のみことの しきます国の尺 湯はしもさはにあれとも

嶋山のよろしきくにと こゝしきいよのたかねの いさにはのおかにた

ゝして うたふおもひいふおもひせし みゆのうへのこむらをみれば

おみの木もおひつきにけり なくとりのこゑもかわらす とおきよにか

みさひゆかん みゆきしところ

反歌(三二六)

もしきのおほみや人のにきたつにふなのりしけんとしのしらなく

万葉 十二(三二六)

にきたつにふなのりせんと聞しなへになにかも君か見えこざるらん

家集 伊予国の歌(二九〇)

柿本人麿

作者不詳

はかなしや風にうかへるくものいよ心ほそくもそらにわたれる
嶋山 万七(二三一七) 読人不知

たちはなのしまにしおれはかほとをみさらさてぬひし我した衣
名歌集(夫木一九八六) 中納言為家

雲間より入日にまかふ嶋山のふもとめぐりはとまりとそぎく
建長八年百首歌合 夫木(二三四九) 前大納言顯朝

嶋山の尾上の桜ちるおりは風におちそふ瀧のしらいと
やのゝ神山 万十(二二八二) 柿本人麿

つまかくすやのゝかみ山つゆしもにほひそめたりちらまくおしも
家集(閏月三三七) 常盤井入道前大政大臣

秋といへは鳴や小鹿の妻かくすやのゝ神山つゆそそむらん
玉葉集(四) 入道前大政大臣

梓弓はるたつらしものゝふのやのゝ神山霞たなひく
百首御歌 夫木(三七二八) 後九条内大臣

夏はつるやのゝかみ山たち忍ひまた妻かくす鹿や鳴らん
家集(二二九五) 従二位家隆

妻かくすやのゝ神山たちまよひゆふへの霧にしかそ鳴なる
ゝ(夫木六一六三) 民部卿為家

露しもややのゝかみ山くれなぬに匂ひそめたる峯の紅葉ゝ
建長七年顯朝卿家千首歌合 夫木(二三八五) 光俊朝臣

つまかくすやのゝ山なるかゑの木のつねなき恋にわれ年はへぬ
家集(夫木一四六九三) 民部卿為家

梓弓はるといふより引かへてはやくそいわふやのゝ里人
伊与国入野 家集(二八九八) 家隆

たかたにに野の枕それなから籬の薄とふ人もなし
家集 前大納言為氏

さをしかのいるのゝまくす恨てもなを立かへりつまやこふらん
百首御歌 夫木(五六五二) 順徳院御製

かり人のいるのゝあさちふみしたき鳴や鶉のとも残らす
建永元年和歌所三首歌合 夫木(九六三〇) 具親朝臣

さをしかのいるのゝ薄ほのくくとあけぬるかよのみねのうすきり
千五百番歌合 家集(八三八) 後京極撰政

旅人のいるのゝおはなたまくらにむすひかはせる女良花かな
ゝ(夫木四三三三) 民部卿為家

かり人のいるのゝすゝきうちなひきとたちあらはす秋風そ吹
櫛の津 万十六(二八四六) 長忌寸意吉麿

さすなへに湯わかせ子ともいちゐるの津のひはしよりこんきつにあむさん
伊予の湯 六花集(二六七二) 読人不知

いよの湯のゆけたはいくつ左八ツ右は九ツ中は十六
古歌集 読人不知

いよの湯のゆけたはいくついさしらすかすへすよますや君そしるらん
伊予簾 新六帖(夫木一五四二) 光俊

年をへて世にすゝけたるいよ簾かけさけられてみをはすてゝき
家集(夫木一五四三) 惠慶法師

あふ事のもとをにあめるいよすたれいよくわれをわひさする哉
能因法師いよの国へ罷下りけるに 後拾遺(四八二) 藤原家経朝臣

春は花秋は月にと契つゝけふを別れとおもはさりけり
能因法師伊与国よりのほりて 又かへり下りけるに 馬のはなむ
けして 明んはるのほらんと云侍りければよめる 家集(四八三)

おもへたゝたのめていにし春たにも花のさかりはいかゝまたまし
源兼長朝臣

いよの国より十二月十日比に舟にのりて いそきまかりのほりけ

るに 後拾遺(五三二)

式部大輔資業

いそぎつゝ舟出そしつる年のうちに花の都の春にあふへく

範圍朝臣にくして伊与の国にまかりたりけるに 正月より三四月

まていかにも雨のふらさりければ なはしろもせてよろづに祈り

さわきけれとかなわざりければ 守 能因歌読て一宮にまいらせ

て雨いのれと申ければ まいりて祈申ける歌

金葉(六二五) 能因法師

天の河苗代水にせきくたせあま降ます神ならば神

神感ありて大雨降て三日三夜やますと家集に見えたり

三百首 中納言定家卿

いよち行是山つみはみしま江のあしきもなとか鳥をとるらん

三嶋社に奉りける歌 夫木(七四三二) 権僧正公朝

みしま野に神の御鷹をひきすへてからぬ日もなしおほとしのにえ

弘安五年歌合 夫木(二〇二八) 読人不知

三嶋江にますけのなへやもへぬらし友よふ駒のけしきしるしも

家集(夫木一六六三) 俊成卿女

帰るかり雲に消ゆくあり明の空もひとつにみしま江の月

山 家(家集六六七・一九一) 西行上人

わかこひはみしまか沖に漕出てなころわつらふ海士のつりふね

かせふけは花さく波のおるたひにさくらかひよるみしまえの浦

三嶋浦 家集(夫木一六五二) 中務卿みこ鎌倉

しつみゆくみしまのうらのはまひさきひさしや袖を君にまかせて

現六帖(夫木一六五三) 読人不知

うかりけるみしまのうらのもしほ火のもえてこかれてよをつくせとや

家集(夫木一五一九二) 能宣朝臣

新勅 十一(七六四)

行能朝臣

かすならぬみしまかくれにくく舟の跡なきものは思ひなりけり

堀川院に百首歌奉ける時はしめて

(初逢恋 続後撰(八一五) 基 俊

三嶋江の入江に生る白すけのしらぬ人をも逢みつるかな

風速の浦 万十五(三六三七) 読人不知

わかゆへにいなけくらし風速の浦の沖へにきりたちけり

三嶋社に奉りける歌 草庵(二四一八) 頓阿法師

いにしへの苗代みつのためしあれは此手向にやくよろひくらん

式部大輔資業伊与守に侍ける時 かの国の三嶋名神にあつまあそ

ひして奉りけるをよめる 後拾遺(二七二) 能因法師

うと浜にあまの羽衣むかしきて振けん袖やけふのはふりこ

三嶋の社に本地の名号をはしめにおきてよみて奉りける歌の中に

新撰(八六九) 左兵衛督直義

くらきよりくらきにまよふ心にもはなれぬ月を待そはかなき

与州三嶋明神示現によりていけにへをとめられし時 よみて奉

ける 家集(夫木一六三五二) 一遍上人

あともなき雲にあらそふ心こそ中／＼月のさはりなりけれ

三嶋社奉る神楽歌 庭火 夫木(七五三四・七五三七) 権僧正公朝

庭火たきとよにありしなかなきのとりのねきけはあけぬ此よは

にはひたくとよのあかりのから玉をこきちらしてもふるあられかな

にはひたぎちまぎのほこをとりもちていわとのまへにひれふるや誰

おほめくか庭火のかけにあさちはら八百万代の神あそひまて

津おの崎 万三(三五五) 若湯彦王

あしへには田鶴か音なきて湊風さむく吹らんつおの崎はも

石城嶋 名歌集(夫木一〇四二九)

読人不知

いよの海いはぎの嶋は我なれやあふことかたきしほのみそやく

新六帖(夫木一七四二)

衣笠内大臣

つれなきは石城の浜のしぎ浪のなにと心をかけはしめけん

箱 渚 名歌集

西行法師

箱渚のいそぎてきつる君やしるふたまてしほはみつやみたすや

いよの国に侍りける時 守のほりける比よみてつかはしける

後撰(鏡後拾遺五〇)

能因法師

ことしけきみやこなりともさよふけて浦になく鶴思ひおこせよ

参議広業たへて後いよの守にて下りけるにつかはしける

詞花(一七二)

民部内侍

都にておほつかなきをならはすは旅ねをいかに思ひやらまし

伊与の高ね 名歌(夫木九〇七九)

洞院大臣

道遠きいよの高ねを尋ても人の行急を我にしらせよ

菅生の山 明玉(夫木八九八〇)

為 影

朝なきに漕出みれはいよちよりすがふの山に雲のかゝれる

由流岐の橋 懷中

源頼光

緑色に春はつれなくみゆる木のはししも秋は先紅葉けり

宇和郡 家集(解七)

清少納言

うは郡あわにむすへるひもなれはかさすひかけにゆるふばかりそ

玉葉集(二七三二)

いよの国うわの郡のをまてもわれこそはなれ世をすくふらん

此御歌は住吉の社へ賤き男の参りて侍りけり 魚を食したる

身にてかゝる所に参たることをあしき事にやとおそれおもひて

まどろみたるゆめに かくなんつけさせ給ひけるとなん

(土佐国)

土佐国配する時歌二首并短歌 万六(二〇二四) 石上乙磨卿

いそのかみふるのみことは たわやめのまよひによりて むましものな

わとりつけて しくし物ゆみやかこみて おほきみのみことかしこみ

あまさかるひなへにまかり ふるころもまたうち山より かへりこぬか

も

反 歌(但し、反歌にあらず。一〇二四の長歌の一部)

おほきみのみことかしこみさゝなみし国にいてますやわかせる君を

万 葉 六(二〇二五、前に五句略あり)

かけまくもゆゝしかしこし すみの江のあら人かみの ふなのへにうし

はきたまひ つけ給はんしまのさきく より給はんいそのさきく

うらなみの風にあわせす 草つゝみやまひあらせず すみやかにかへし

給はね もとの国へに

反 歌(二〇二七、一〇二六の反歌)

おほさきの神のおはまはせはけれともゝ舟人もすくといはなくに

名歌集

中納言光俊

千葉振神の小浜に舟とめて大崎みれはつきのさやけき

現六帖(夫木二二四四)

藤原孝氏

おほさきのありそのわたり霧こめておちかた声も舟よはふ也

夫木集(二二四五)

中納言経光

すへとをき千代のかけこそひさしけれまた二葉なるおほさきの松

名越山 万(二八二六)

読人不知

わかせこを名越の山のよふことりきみよひかへせよのふけぬとに

千五百番歌合(夫木一〇三三五)

季 能

みな月のなごしの杜の夕すゝみみそぎもまたぬ秋のはつ風

現六帖(八六七)

読人不知

みな月のなごしの山のよふこ鳥おほぬさにのみ声の聞ゆる

夫木集(三七九丸)

従三位頼氏

みな月のみそぎかわらのかへるさになごしの山のくもそ明ゆく

打山 名歌集(万葉一〇二四 長歌の後半)

皇太后大夫俊成

あまさかるひなへにまかり古衣又うち山にかへりこぬかも

御座浦 古歌

中納言俊頼

うちふせはみましのうらはかひもなし衣かたしく人しなけれは

かゝみ河 夫木(二四二六)

前内大臣基

かゝみかはかけみる月に底澄てしつむみくすの恥かしき哉

夫木集

読人不知

花のちる山のふもとのかゝみ河日をへて春はせくへかりけり

建保八年百首歌合 家集(夫木六四九九)

衣笠内大臣

嵐ふく山のふもとのかゝみ河岩せみなきり行紅葉哉

夫木集(一〇九八九)

読人不知

影みんと思ひし物を鏡川浅ましくても絶しみつかな

土佐国室戸といふ所にて 新勅(五七四)

弘法大師

法性の室戸といへと我すめはうゐの浪かせよせぬ日そなき

土佐国鶴の橋 夫木(九四二五)

民部卿為家

あまの川雲のみをなる五月雨にとたへもしらぬかさゝきののはし

家集(二四五七)

中納言定家卿

あまつ風はつ雪しろしかさゝきのとわたるはしの有明の空

御集(万代・八〇五)

上東門院

暮をまつ雲ゐのほともおほつかなふみまほしき鶴のはし

水茎の岡 御集

前左大臣

つれもなき人に見せはや水くきの丘のあさちのみたれやすきを

新拾遺(四〇七、万代一四四六)

順徳院

水くきの丘のあさちの葦霜のふりはや夜さむなるらん

六帖題(夫木一三三六一)

中務卿みこ鎌倉

このねぬるあさつゆさむみ水くきのおかのあさちに秋風そ吹

蒸明の瀬戸 夫木(家集一六九)

中納言定家

しるへせよむしあけのせとの松の風ほか行波のしらぬ別れに

ひちぎの灘 万十七(三九一五)

読人不知

昨日こそふなてはせしかいさなとるひちぎのなたをけふみつる哉

土佐国の歌 家集(二九二)

柿本人麿

湊さる舟こそ今朝はあやしけれ日たけて風の吹てかへるに

小倉山 夫木(二三三九五)

民部卿為家

小くら山松のしたはに青つゝらみちなきよこそ人くるしけれ

土佐海 家集(二六四七)

家隆卿

とさの海に御舟うかへてあそふらし都の空は風そのとけき

久安百首(六九六、夫木一〇三二)

前参議隆親卿

ひはかりをたのみて出ぬこのたひは漕手もたゆきとさの舟ちに

家集(夫木一三二〇五)

六条院宣旨

ひはかりはみなとのせとにたてゝけりはや漕いたせとさのとも舟

土佐国かこの崎といふ所にて貫之かわかれをおしみて

日記(五、一) 土佐守藤原兼高

おしと思ふ人やとまるとあしかものうちむれてこそ我はきにけり

みやこいてゝきみにあはんとこし物をこしかひもなく別れぬる哉

返し(二) 前土佐守貫之

白妙のなみちをとをくゆきかひてわれににへきはたれならなくに

大湊(六)

さほさせとそこひもしらぬわたつうみの深き心を君そみるかな

宇多の松はらをゆきすく　その松のかすいくそはく　ちとせへたりとしらす　もとことになみうちよせ　えたことに鶴そとひかふ

おもしろしとみるにたえずして舟人のよめる歌（二・三・四・二〇）

みわたせは松のうれことにすむ鶴は千代のとしを思ふつらなる

吹かせのたへぬかきりし立くれはなみちはいとゝ春けかりけり

みなその月のうへより漕ふねのさほにさわるはかつら也けり

土佐国はねといふ海辺にて（一五・一八）　貫之女

まことにて名にきく所はねならばとふかことくに都へもかな

たてはたつみれば又あるふくかせと浪とおもふとちにあるらん

土佐国の年経て侍ける時　歌あまたよみ侍りけるに　新勅（五一・三）

藤原朝臣兼高

暁そなをうき物としられにしみやこを出し有明のそら

千五百番歌合夫木（七七・五八）

なにとなく心ほそさは南ふくとさのふなちの明かたのそら

宝治二年百首（夫木・一一九〇二）

大宰師為経

かせあらきとさの湊を漕舟のくるしき物は心なりけり

久安百首（四八三、夫木は「とき」一六八・一六）

読人不知

とさの海あはの鳴戸をさしなから田に作るまで君はましませ

祝言夫木（二〇三・二三）

空仁法師

君か代は浪にわつらふとさの海の駒にまかする道となるまで

往昔仁安二年十月の比　西上人四国すきやうに渡らせ給ひ　讃岐国綾の
松山新院の御あとをしたひ頼證寺の御陵に詣て法施し奉り　みほ坂にし
はらく留り給ひ　寿永二年むつきの下旬善通寺の方丈の菴にして撰集鈔

をしるしおはり　其外名所の詠歌あまた有　是をもとゝして四国の歌枕
を集て麻糸和歌抄といふ　或はいわく　四国の名所にあらす雑歌たりと
いへともまさしく其国に多ん有歌是をいたす　いま我頑愚をはちらはす
西上人のむすひたまひし綾の郡みほ坂の林なら柴の草庵におゐて書終
永く住吉玉津島の光を恐て少も私を入れす　時に宝曆六年丙子二月十五
日　釈冬阿　猶ねもころにはさえあらん人後にあらため給へ

皇都

書林橘枝堂

野田藤八板行

（昭和六十三年十月十一日受理）